

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年 6月10日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02106

研究課題名（和文）戦間期ドイツ/オーストリアにおけるジャズ受容についての歴史的研究

研究課題名（英文）Jazz reception in Germany during 1920/30s

研究代表者

岡田 暁生（Akeo, Okada）

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：70243136

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：ヨーロッパにおけるジャズ受容がアメリカにおけるそれと端的に違う点は、当初より「芸術」として受け入れられてきた点にある。時期的にこれは、政治上は第一次大戦によって、音楽史的には無調や未来派のノイズ音楽によって、19世紀的なヨーロッパ秩序が根底から揺さぶられ、いわばヨーロッパが政治的にも文化的にも自信喪失状態にあった時代にあっていた。つまりジャズはアメリカという新たな世界へゲモニーのシンボルであり、旧世界にとって新世界から与えられた活力剤であると理解された。戦間期にジャズに熱中した作曲家は枚挙にいとまがない。

研究成果の概要（英文）：Jazz reception in Europe differs from that in America in that it was understood as “Art”, not as entertainment. On 1920/30s, the epoch in which Europe lost world hegemony by the shock of the First World War, jazz was received in Europe as a Symbol of New World/ New Epoch. It was the reason why so many classic-modern composers in Europe was so enthusiastic for jazz at that time.

研究分野：音楽学

キーワード：ジャズ 戦間期 受容史 20世紀音楽

1. 研究開始当初の背景

本研究は第一次大戦がヨーロッパ音楽史でもっていた意味を探る中で生まれてきたものである。20世紀がアメリカの世紀であったとすれば、そのきっかけとなったのは第一次世界大戦である。ヨーロッパの一種の内戦が世界に波及したこの戦争を、火元となったヨーロッパは自らによって鎮火させることが出来ず、アメリカ参戦によってようやく收拾することが出来た。それは世界へゲモニーが旧大陸から新大陸へ移ったことを告げる出来事であった。

アメリカが参戦した1917年(ロシア革命の年でもある)には音楽史的にもエポックの切れ目を象徴する出来事が起きている。まずオリジナル・ディキシーランド・ジャズバンドと称するグループのレコードが大ヒットを飛ばし、ここで初めて「ジャズ」という言葉が「公式に」用いられる。そして同じく1917年には、第一次大戦参戦のためパリにやってきたニューヨーク・ハーレムの黒人部隊によって、はじめてヨーロッパで「生」で演奏され、当地の人々の間でセンセーションを巻き起こしたのである。これらは一般に「ジャズ・エイジ」と呼ばれる1920年代の大衆文化の時代の幕開けを告げる出来事であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は 第一次大戦後という歴史的な文脈の中での戦間期ヨーロッパのジャズ受容の文化背景 戦間期のヨーロッパ・モダニズムの作曲家たちのジャズ受容の諸相 戦間期におけるヨーロッパの熱狂的なジャズ受容が戦後のモダン・ジャズに与えた影響 を明らかにする点にある。

3. 研究の方法

ヨーロッパ諸都市の図書館における文献資料の調査(特にドイツの音楽雑誌)およびヨーロッパ・モダニズムの作曲家たちの伝記的事実と音楽様式の分析を主たる研究方法とした。

4. 研究成果

ヨーロッパにおけるジャズ受容の顕著な出来事は、それが 長い間(モダン・ジャズの時代になってもなお)娯楽音楽としか思われていなかったアメリカ本国と違って 当初より「芸術」として受け入れられてきた点にある。『ラグタイム』や『兵士の物語』においてジャズの様式を取り入れた曲を作ったストラヴィンスキーをはじめとし、ジャズに魅了された戦間期のヨーロッパのクラシック・モダニズム系の作曲家は枚挙にいとまがない。時期的にこれは、政治上は第一次大戦によって、音楽史的には無調や未来派のノイズ音楽によって、19世紀的なヨーロッパ秩序が根底から揺さぶられ、いわ

ばヨーロッパが政治的にも文化的にも自信喪失状態にあった時代にあっている。ラヴェルも『ヴァイオリン・ソナタ』やピアノ協奏曲ト長調や左手のためのピアノ協奏曲など、ジャズ・バンドを模倣した作品を多く残り、ドイツでもヒンデミットはピアノ曲『1923年』をはじめとする初期作品でいわゆる「狂乱の20年代」のシンボルとしてジャズのイデオロムを用いた。成立したばかりのソビエト連邦においても、まだ文化統制がゆるやかで前衛芸術が百花繚乱の様子を見せた1920年代初期において、例えばショスタコーヴィッチは多くのジャズ風の曲を書いている(ピアノとトランペットのための協奏曲もジャズ・バンドを模倣した編成・様式によっている)。ヒンデミットやショスタコーヴィッチにおいてジャズは「大都会の狂乱騒音」の象徴であったと考えられ、その意味で同時期に大量に作られるいわゆる「大都会映画」の並行現象であった。

第一次大戦後はヨーロッパの大都市の高級ホテルのダンスホールのバンドが、すべてヨーロッパ風のものからアメリカ風のスタイルに切り替えられたといわれるが、とりわけ多くの「ジャズ・ミュージシャン」を輩出したのがチェコである(特にユダヤ人が多かった)。戦間期のジャズ・スタイルによるヨーロッパ・モダニズムの作曲家を代表するシュールホフの作風は、こういう背景から生まれてきた。シュールホフにおいて注目すべきは、彼が共産党員であった点である。1920年代は伝統的な(そして従来のヨーロッパ・クラシック音楽の主要な担い手であった)上流ブルジョワが没落していく時代、代わって大衆が社会の主導権を握るようになる時代であり、この時代には特にドイツにおいて、コンサートホール音楽(交響曲など)がしばしば旧態依然たるブルジョワ文化の遺物として批判されるようになるが(例えば作曲家のアイスラーがいるが、彼も共産党員であった)、この文脈におけるジャズは「アメリカ=大衆文化」のシンボルとして、「アンチ・ブルジョワ文化」の含意をもっていたと思われる。すなわち当時はまだ「大衆音楽 vs 前衛芸術音楽」という二分法は存在しておらず、左翼系の思想をもつ芸術家たちにとっては大衆音楽と前衛音楽が結びつくことにより、従来のブルジョワ芸術音楽に対抗するという図式があったことが想像される。戦間期は(1913年に初演された『春の祭典』以来)「リズム」がモダニズム系の作曲家にとっての大きな関心事となる時期であるが(これはバルトークのようにジャズにほとんど興味を示さなかった作曲家についても当てはまる)、ジャズへの熱狂がこの文脈にあったことも疑いない。1920年代はまた全ヨーロッパで黒人ダンサーのジョセフィン・ベーカーが熱狂的な人気を博する時代でもあるが、ジャズ受容はこのフォービズム的な潮流とも重なっている。その端的な例はミヨー

の『世界の創造』であり、ブラジルのジャングルを舞台にするこの音楽劇では当時のジャズ・イデオロムがふんだんに用いられている。

戦間期のジャズ受容のもう一つのキーワードが「遊戯 Spiel」ないし「運動 Bewegung」である。戦間期のヨーロッパ・モダニズムが「アンチ・ブルジョワ」であると同時に「アンチ・ロマン派」であったとすると、それは「表現」に対して激しい敵意を示した。ネオ・バロックや新古典主義もまた、音楽が情緒表現となる 19 世紀ロマン派以前に立ち返ろうとする動きだったといえる。こうやって戦間期の多くの音楽は、情緒や形而上学表現を排した純粋な音の「運動」ないし「Motorik」ないし「遊戯」を探求するようになるが（例えばストラヴィンスキー）、ヒンデミットのヴィオラ・ソナタや室内音楽第一番（とりわけ終楽章）のように全編嵐のような機械的な運動が展開されるだけの作品にもまた、ジャズの影響を認めることが出来る。

従来ヨーロッパ芸術音楽と比べたときの音楽様式面でのジャズの際立った特徴の一つが、ルバートを排除する点である。19 世紀ロマン派音楽は例えばショパンに典型がみられるよう、ルバートによる情緒表現を不可欠の糧としていた。それに対してジャズは正確に同じ周期で上下運動を続ける工場機械のシリンダーのようなリズムを特徴とする。すなわち一般にジャズのリズムの特徴と信じられているシンコペーション以上に、このテンポの機械性がジャズを伝統的なクラシック音楽からリズム面で区別しているのである。時代を問わずジャズミュージシャンは、演奏の間ずっと足でテンポを刻み続けているが、それはどれだけ複雑なリズムになっても微動だに狂いが無い。そしてまさにこのリズム／テンポの刻み／非情緒性／機械性こそが、同時代人に強くアピールした要素の一つでもあった。それはつまり 1920 年代に大流行する新即物主義の演奏様式と完全に符合していたのである。

19 世紀ロマン派の流れを汲む演奏家は巧みなルバートの使用を表現の生命としていた（フルトヴェングラーはその意味で「古い」タイプの指揮者とみなされていた）。それに対して戦間期の新しい演奏モデルを打ち立てたトスカニーニの特徴は、早めのドライなテンポ、とりわけ最初から終わりまでテンポが微動だにしないこと、完璧な合奏にあった。例えばアドルノはトスカニーニの演奏様式の中に、イタリア未来派の機械賛美との関係を見ている。そしてまさにこの意味でジャズは、新即物主義の演奏様式と同じく、「機械的な音楽」であった。従来「有機的な音楽」に対して「機械的な音楽」を対比させたのはドイツの音楽批評家パウル・ベッカーであるが、ジャズと新即物主義は完全な同時代現象であり、機械的な音楽の範型であった。以上のように戦間期のヨーロッパにおいて

ジャズは、「大都会モダニズム」「大衆とのアンチ・ブルジョワの共闘」「原始的活力」「遊戯ないし運動」「機械性」などを象徴していたが、何よりまたアメリカという新たな世界ヘゲモニーのシンボルであり、旧世界にとって新世界から与えられた活力剤であると理解されていた。このように考えることによってのみ、戦間期のヨーロッパ・モダニズム作曲家のジャズへの熱狂は理解できる。

こうした 1920 年代の受容を素地として、1930 年代に入るとフランスのジャンゴ・ラインハルトのようなヨーロッパの「自前の」一級のジャズ・ミュージシャンが生まれ、前述のようにチェコはユダヤ系の多くの音楽家を輩出したり（当然ながら彼らの活動の場はドイツ・オーストリアが中心であり、ナチスが政権をとって以来ジャズは公式には禁じられていたが、しかし水面下ではドイツ国民の多くがジャズに熱狂しており、政権もこれを完全に禁止することは出来なかった）、ルイ・アームストロングやデューク・エリントンのヨーロッパ・ツアーが行われたりするようになる。そして第二次大戦が始まるとアメリカ軍はジャズを「自由のシンボル」として、ラジオ放送などを通じて熱心にプロパガンダに利用するようになった。慰問でヨーロッパを訪れているさなかに行方不明となったグレン・ミラーもまた、そういう活動に従事していた一人である。

このような戦前のジャズ受容の蓄積を背景として、戦後になるととりわけパリはモダン・ジャズのヨーロッパにおける拠点の一つとなる。例えばマイルス・デイヴィスの創作にパリ滞在は絶大な影響を及ぼし（ミシェル・ルグランとの共作アルバムや有名な『死刑台のエレベーター』の音楽など）、バド・パウエルのようにパリに活動拠点を移す黒人ミュージシャンも出てきた。デクスター・ゴードンとケニー・ドリューが住んで、その後のヨーロッパ・ジャズの中心を担う地元の音楽家が多く生まれたストックホルムも重要である。またチェコからはミロセヴィッチ・ヴィトウスのような革命的な音楽家が生まれ、とりわけ 1970 年代のアメリカにおけるジャズ史に決定的な影響を与えた。戦争直後のウィーンで進駐軍を通してジャズに触れたジョー・ザヴィヌルのように、アメリカに逆輸入されてアメリカにおけるジャズ史に甚大な影響を与える人物も出てきた。さらに戦間期ヨーロッパにおいてジャズに触れ、後にアメリカへ亡命して、当地で主としてマネージメントの部分でジャズ史に絶大な貢献をしたアルフレッド・ライオンのような人物も忘れてはならない。戦後ニューヨークにおけるジャズ・クラブの経営者の多くがまた、ライオンと同じくドイツからのユダヤ系移民であったといわれる。すなわち 1950・60 年代のアメリカにおけるモダン・ジャズの黄金時代は、ある意味で戦間期ドイツのいわゆるワイマール文化におけるジャズ

への熱狂が大陸を渡って戦後開花したものと見ることができるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

Akeo OKADA: Imaginary Song of the West: Ryuichi Sakamoto, Masahiro Miwa and the Music of Postmodern Japan, in: Contemporary music in East Asia (ed. by Hee Sook Oh), Seoul National University Press 2015, p.153-166、査読あり

Akeo OKADA: Reduktion, Repetition und Verstärkerung in: Verkörperungen der Musik. Interdisziplinäre Betrachtung (ed. by Jörn Peter Hiekel and Wolfgang Lessing), Bielefeld: Transcript Verlag 2015, pp.162-185、査読あり

Akeo OKADA: The First World War. A Trans-Disciplinary Study, in: The World during the First World War (ed. by Helmut Bley and Anorthe Kremers), Essen: Klartext 2014, p.369-371

Akeo OKADA: Music, in: International Encyclopedia of the First World War 1914-18 (国際ネット事典の項目 <http://www.1914-1918-online.net/>)

岡田暁生、ダヌンツィオの生きた時代、村松真理子編『ダヌンツィオに夢中だった頃』、イタリア地中海研究叢書 1、査読あり、2015、174 - 180

岡田暁生、リングでめぐる総合芸術都市ウィーン、池田祐子編、西洋近代の都市と芸術 4、査読あり、2016、81 - 97 竹林舎

〔学会発表〕(計 1 件)

Akeo OKADA: フォルクスワーゲン基金主催 'The World during the First World War '(於ハノーヴァー) 2013年10月30日 講演名「The First World War. A Trans-Disciplinary Study」

〔図書〕(計 1 件)

岡田暁生、小学館、クラシック音楽とは何なのか、2017、268

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

岡田暁生 (OKADA, Akeo)
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：70243136

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし